

奄美ならではの研修 ～無人島でよか余暇～

機械電気科 大冨 将範, 大坪 睦貴, 小藺 真介 国語科 加塩 卓朗

1 はじめに

私たち鹿児島県教職員は、県の全域において普遍的で均等な教育の教授を実現するという理念のもと、定期的な異動によって県内各地を赴任してまわる。新任地においてはよりよい授業や生徒指導を行うためには、まずその地域の地政学的観点からの地域特性等の深い理解が不可欠であるが、そのためには積極的にその地域に溶け込み、主体的に活動し、校外にも赴く必要がある。特にここ奄美群島地区は、地理的にも歴史的にも本土との様相の差異が大きく、一つの行政区（県）の中でこれほど異なる気候・文化を抱え持つ地域は、全国的に見ても稀有であろう。



私たちの奄美群島地区での赴任期間は原則として5か年であるが、他地域のそれが7か年であることを鑑みれば、地域理解に掛けることの時間は比較的短いといってよい。加えて奄美群島は世界的にも特異な自然環境を有し、世界でもこの地域にしか生息しない多くの動植物が存在し、また歴史的にも近代において薩摩・島津の侵攻・支配を受けていたことなど、鹿児島県職員として身につけておかなければならない知見は県内の他地域のそれに比べても特別である。

今回、奄美をより深く理解するうえで、まずは自然環境の豊かさ、亜熱帯気候の特性等について知ろうと、野外での宿泊体験を企画・実施した。

2 参加者紹介

機械電気科 大冨 将範 (写真右端)

奄美野鳥の会での月例探鳥会、奄美ネイチャーセンターでの自然観察会など、奄美の自然を積極的に満喫中。赴任2年目にして奄美の主要林道はほぼ踏破した。学生時代はかごしま水族館と平川動物公園にてガイドボランティア等に従事。大学の卒論および修論のテーマは「屋久島におけるウミガメの生態に配慮した護岸養浜について」。



機械電気科 大坪 睦貴（写真右から2番目）

地域により深く溶け込もうと、前任校赴任時から学期に一度はクラスの保護者との懇親会を実施している。どんなことでも経験してみたいと思うチャレンジ精神旺盛な鹿屋っ子。もっともっと奄美を好きになりたくて今回の研修に参加。大学の卒論テーマは「超音波洗浄とキャビテーションについて」。

機械電気科 小菌 真介（写真左端）

キャンプ歴は長く、大学時代にはバイクにテントを積んで北海道の宗谷岬まで走破している。屋外での炊飯を得意とし、今回のキャンプ料理を全てプロデュースした。キャンプに対しての座右の銘は「キャンプは苦行である」。大学の卒論テーマは「バイオマスの浮遊外熱式ガス化法の研究について」。

国語科 加塩 卓朗（写真左から2番目）

志布志の山奥で生まれ育ったにもかかわらず、アウトドアの知識はほぼ皆無。一貫した文系畑を歩んできたが、今年度機械電気科の担任を持ったことにより理系の社会に触れる。コペルニクスの転回に触れ、さらに刺激的で未知の経験を体験したく今回の研修に参加。大学の卒論テーマは「川端康成作品のテキスト論分析」、修論は「国語科における比喩読みについて」。

3 活動日程（タイムテーブル）

タイムテーブルはそれぞれの時間幅を視覚的に見てとれるよう、1時間ごとに帯表示とした。

9月12日 (月)	07:00	学校集合, 荷物の積込等	9月13日 (火)	06:00	起床, 朝食準備
	08:00	学校発		07:00	朝食
	09:00	古仁屋港着		08:00	自己研修(自由活動) 島内散策, 遊泳等
	10:00	江仁屋離島着, タープ設営, テント設営, 昼食準備		09:00	
	11:00			10:00	
	12:00	昼食		11:00	離島準備(清掃活動)
	13:00	自己研修(自由活動) 島内散策, 遊泳等		12:00	江仁屋離島発,
	14:00			13:00	景勝地巡回
	15:00			14:00	古仁屋港着
	16:00			15:00	学校着
	17:00	夕食準備, 懇親会会場設営			
	18:00	夕食, 懇親会			
19:00					
20:00					
21:00					
22:00					
23:00					
00:00	就寝				

4 研修に参加して（それぞれの所感）

(1) 濃くも美しい二日間（大富 将範）

いつ、どこでだったか、初めてその島の存在を知ったとき、心臓をわしづかみに揉

まれるほどの胸の高まりを覚えた。瀬戸内町は与路島の沖合いに浮かぶ、周囲 1.8 キロほどの小さな無人島、ハンミヤ島の存在を知った時だ。島の名前は与路島と東隣の請島との狭間（島の言葉でハミヤ）にあることがその語源であるらしいのだが、それはさておき、そのハンミヤ島は島の形状が他に類をみないほど特異なのだ。白く輝く砂浜が海から内陸に向かって山のように立ち上がり、海面からのその高さはゆうに 30 メートルをこえて、それはまるで巨大な白い滑り台のような存在感を放っている。遠目からでもよくわかるその景観は、人の心を引き付けるに余りある要素を備えている。この島に足を踏み入れてみたい。砂浜を滑り降りてみたい。その浜に横たわり、大の字になって無二の大自然の中に自分をうずめてみたい。その野望にも似たあこがれが今回の研修の発端であった。

ハンミヤ島を訪れるにあたり、まずは島の概要や渡航方法についてよく知らなければならぬ。今の時代、インターネットで大抵のことは調べられるが、ことハンミヤ島に関しては、インターネットを駆使しても有意な情報を得るには不十分であった。そこでまず、その島を管理する瀬戸内町役場に電話し、渡航方法等について情報収集を試みた。話によれば、ハンミヤ島に行くには、古仁屋で海上タクシーをチャーターしてそのまま島に上陸する方法と、もう一つは古仁屋から定期船「フェリーせとなみ」に乗って与路島に渡り、そこで改めて海上タクシーを見つけて島まで送ってもらう方法があることが分かった。前者は乗り換えがない分スムーズだが割高、後者は安く上がるが現地到着までに時間と手間がかかることがネックである。フェリーに揺られる旅も乙なものだが、今回は人数も荷物も多いために、古仁屋から海上タクシーをチャーターすることにした。役場から紹介を受けた古仁屋貸切船組合というところに電話して、ハンミヤ島まで送ってくれる船を紹介してもらおう。改めて、紹介してもらった船の船長に電話をかけたのだが、ここで思わぬ難関に出くわした。電話口の船長の島口（方言）が強すぎて、会話の内容がほぼ聞き取れない。こちらの言っていることは理解してもらっているようだが、向こうの言っている内容が（特に肝心な部分が）ほぼ全くと言っていいほど、聞き取れない。具体的には「ハンミヤもいけどー（ここまでは聞き取れる）、エニャバナレユイガシマユーバナレキヤマスコモバナレもイーヨ」といった内容がものすごいイントネーションで、しかもそれがただでさえ聞きとりやすいとはいえないスマホのスピーカーを介して、マシンガンのように流れてくる。結局、何度聞きなおしても内容が理解できず、向こうもしびれを切らしてきた感があったので、今話の内容をメールで送ってもらえないかと提案した。メールでも意思の疎通ができないとなれば今回の計画は立ち消えだ、との不安の中、届いたメールに目を通す。案の上、メールでも一部理解できない個所があったが、これでなんとか意思の疎通ができた。ちなみに余談であるが、面白いもので、この船長と二日間を共にし、彼の人となり十分に触れた今なら、先ほどの会話の内容は聞き取れたと思われる。次回お世話になる時は、今回よりもスムーズに話が通るはずだ。

研修を前に、まずは無人島生活に必要な物資を揃える必要がある。加塩は、これまでキャンプ等のアウトドア体験をしたことがなく、そもそも野外で一泊するにあつ

て何が必要なのか、見当がつかないという。つまり、テント一つとっても、数あるテントの中からどういったタイプのテントが自分に必要なかが分からないのだ。そこで、アドバイザーとして小菌とともに三人で買い出しにでかけた。より幅広いキャンプ道具一式を揃えているであろうと、量販店で島内一の敷地面積を誇るビッグⅡに赴く。現地では日陰を確保するためのタープなどを砂浜に張るつもりなので、ここで砂浜専用のペグや、タープをより高く立ち上げるための追加の支柱などを購入。小菌が何を考えたか、ハンミヤ島の絶壁の砂浜を頂上からソリで滑り降りてそのまま海に飛び込み、小石が水を切るように二・三度水面を跳ねてみたいなどと言い出し、雪山用のソリを購入した。こいつは本当に力学や設計の教鞭をとっているのか、金銭感覚はどうなっているのかと首をかしげたが、本人はいたって真面目だ。そして買う方も買う方だが、ここ奄美で雪山用のソリ（しかも日本製でちょっといいもの）を販売しているなんて、さすがはビッグⅡだ。その幅広い品ぞろえに感心することしきりだった。

船長が当日の出発は何時でもいいよというので、無人島の滞在時間を少しでも長くするために、古仁屋港出発を9時をお願いした。そのために名瀬を8時には出発するとして、7時半には学校駐車場に集合とした。四人で荷物の最終確認を行い、休日で閉門された正門の前で、出発の記念撮影。皆で校舎の方に振り返り、研修の成功と安全を祈願する。ふと気付いたのだが、よくよく考えてみれば男四人組の冒険である。これは自分が棺に入れて一緒に葬って欲しいほど大好きな映画『STAND BY ME』と同じシチュエーションではないか。とすれば、まず真っ先に誰がリヴァー・フェニックスなんだということになる。破天荒で信頼厚いイケメンといえば、…この4人から選ぶならば大坪か。主人公のゴードィは思慮深い物書きだから、必然的に加塩。とすれば残った二人は癖のある軍隊かぶれと太っちょ。だれがどっちになるのかと考えて―― どちらにせよ損な役回りだと気付き、考えるのをやめた。

予定通りに古仁屋港に到着。船長にあいさつして、メールで打ち合わせた内容などを確認する。だが、ここで思わぬ急展開に見舞われる。何でも船長曰く、今日・明日は東寄りの風が強いのでハンミヤ島の渡航はお勧めできない、ハンミヤ島行きはやめたほうがいいとのことだった。もっといえば、船長の責任で、ハンミヤ島に送るわけにはいかない、危ないのでキャンプさせるわけにはいかないということらしい。その代わりハンミヤ島に勝るとも劣らぬ素晴らしい無人島があるので、そちらの方を案内してあげるといふ。これまでの経験から、今日の気象条件では、絶対にその無人島の方が自然を満喫できるとのことだった。ハンミヤ島に後ろ髪を引かれる思いはあったが、今回は最後のチャンスという訳でもない。むしろ、楽しみはとっておくという考え方もできる。瀬戸内の海を知り尽くした男の言うことに、ここは素直に従うことにした。その代わりに案内してもらった島こそが、今回の無人島生活の舞台となった「江仁屋離島（えにやばなれじま、島口でエニャバナレ）」である。何でも船長曰く、民放のテレビ番組「無人島でゼロ円生活」のロケ地になったのが、実はハンミヤ島とこのエニャバナレの2か所らしい。そして、その番組に出演した俳優・タレントおよびスタッフをこの二つの島に送迎したのが当の船長だということだ。それを聞いて先ほど

まで引かれていた後ろ髪は、矢吹丈の髪型よろしく前向きとなった。

紺碧と薄青色の海を切り裂きながら船は突き進む。トビウオの群れが慌てふためいたように海面から飛び出す。いや、これからの自分たちの冒険を先導してくれているのか。船長が足元に置いてあるモリを指して、これがテレビ撮影時にTVタレントに貸したモリだと教えてくれた。エニャバナレ上陸を前に気持ちはますます高ぶってくる。古仁屋を出て一時間ほど、目指すエニャバナレが見えてきた。「どうせだから、自分たちが一日生活する島の全景を見てみる？」という船長の粋な計らいで、上陸前に船で島をぐるっと一周してもらった。周回しながら、この岩陰からは大物が狙い目だ、この瀬では季節になるとでかいサザエが採れる、などの話をしてくれていたが、高まる胸を前に、今この瞬間に関係のない話はほとんど耳に入ってこない。島に接岸できる唯一の岩場に船をつけ、荷下ろしをする。船からボートも降ろし、それに乗って初上陸。ボートの舳先から両足を揃えて黄金色に輝く無垢の砂浜にジャンプし、上陸の第一歩を足裏でかみしめた。思えば今回の旅でもっともアドレナリンが噴出したのもこの瞬間であった。加塩も同じようにジャンプして上陸したかったらしい。一張羅のズボンが跳んだときに濡れては困るからと、おもむろにズボンを脱いでパンツ一丁になった。しかし気がせったのだろう、普段やりなれないことをするからだ。船からジャンプして着地したはずみに豪快に浅瀬に尻もちをつき、あわれ彼は下半身ずぶ濡れとなった。上陸を前に一同大爆笑であった。

ふと見ると、波打ち際に10匹ほどのキビナゴが打ち上げられ横たわっている。まるで生きているかのように艶々しており、目も透き通っていて刺身で行けるほどの新鮮さだ。漁師が使い残した生餌でも捨てたのだろうかと思ひ船長に聞いてみたが、そんなことをする漁師はいないという。こんな人里から離れた場所で、日差しが強く生ものなどあつという間に腐敗してしまうような環境に新鮮な魚が落ちている。あまりに不自然かつ不可解極まりない光景を目の当たりにし、この島には何かあるのではと考え、背筋が一瞬ゾクッとなった。その場では頭をひねるばかりだったこの謎は、翌日に解明されることになる。

エニャバナレは周囲が1キロにも満たない小さな島で、海から小山が突き出たような形状になっている。その小山の裾に3つの砂浜が点在しており、それぞれの浜は断崖絶壁で隔てられているため海岸伝いに行き来することはできない。島全体には葉にとげを持つアダンの木がびっしりと密生していて、分け入ることも容易ではないため、事実上、3つの浜は独立している。船長が案内してくれたのはその時の気象条件からみてキャンプにもっとも最適な浜だったのだが、温暖化の影響で海面が上昇しているのか、その砂浜も奥行きは狭く、ベースキャンプを張る場所は必然と限られた。バケツリレーのようにしてみんなで荷物を運んだが、小菌だけは今や活躍の場を失ってしまったソリに大義を与えてやろうと、荷物を括り付けて砂浜を引きずっている。これは夢がかなわなかったストレス防衛機制のうちの反動形成と合理化、および退行が同時に発現した反応と思われ、心理学的に極めて貴重なサンプルだった。オーストラリアのサンタの他に真夏のソリを引く人を見たのは二度目だ。

日差しを遮るものが全くないため、まずはタープの設営からとりかかる。「テントは

寢室，タープはリビング」である。この日のために購入したキャプテンスタッグ社（愛称“鹿番長”）の横 5.5 メートル，幅 4.5 メートルのビッグヘキサタープだ。直前にビッグIIで購入したサンドペグがここで威力を発揮してくれた。ただ，この浜は場所によっては砂の層の厚みが 10 センチほどしかなかった。その下は岩盤になっており，プラスチック製の 40 センチの砂浜用ペグはそれ以上刺さらない。キャンプでは時としてこのような想定外の出来事が起こりがちだが，このような事態を是とし，むしろ楽しむというスタンスこそがキャンプの醍醐味であり，本分だ。その場所ではペグをあきらめ，島中からブロック状のサンゴ塊をかき集めていくつも重ね，それを重しとしてロープを括り付けて固定した。

休憩を兼ねて，タープの中に四人で腰を下ろす。小菌から借りたロゴスの「あぐらチェア」の座り心地がちょうどいい。商品名通りのロースタイルで目線が地面に近く，全ての景色を下から見上げるようだ。つまり，より強く自然を感じることができる設計になっている。ロースタイルのキャンプに憧れてチェアを探している人には，あぐらチェアはベストバイだろう。

皮肉なことに，沖のかなたには当初の目的地であったハンミヤ島の全景が見えている。面白いことに，こちらは焼けつくような晴天だがハンミヤ島の上空には雨雲が立ち込め，そこからシャワーのように雨粒が落ちている様子が見て取れる。そのゆったりと流れる雨雲が，今回は縁がなかったけれど，ハンミヤ島にはまた今度おいでねと，やさしく語りかけているように見えた。しかし，さすがは海のプロフェッショナル，船長だ。ハンミヤ島に強行上陸していれば，今頃雨にたたられていてキャンプの楽しみも半減していたことになる。次回からは，行先や時季について，事前に船長のアドバイスを仰ぐことも考えよう。

のたりのたりと寄せては返す波を見るとはなしに眺め，頬をくすぐる暖かな風を感じ，大洋を旅してきたばかりの湿潤で清浄な空気を胸いっぱい味わい，今無人島にいるというこの現実を，しばし満喫した。朝早く起床してここまで休憩なしに動いていたこともあり，申し合わせたかのように皆無言になり，あるものは物思いにふけり，あるものは昼寝した。俗世間から離脱し，心惑わすものを物理的に遠ざけて創り上げた，自分たちだけの贅沢な時間だった。

キャンプでの夕食に欠かせないのは，その席を彩るための焚火だ。夜通し焚火を満喫するためには，明るいうちにありたけの薪を集めておく必要がある。幸いにして，今回の食事一切は小菌が担当してくれるので，残った大坪と加塩の三人で流木集めに出かける。波打ち際から遠く打ち寄せられた，しっかりと乾燥していて火持ちのよさそうなものを中心に拾い集め，ベースキャンプの横に積み上げていく。三人で黙々とアリのよう働き，大量の流木が積み上がった。おかげで，今夜は奢侈で贅沢なキリギリスの時間を満喫できる。

焚火の中に優しくくゆる炎を見つめれば，なぜか心が落ち着く。ヒトは火とともに生活をし進化してきた。ヒトが動物というカテゴリーから離脱しえたのは，火を自在に操れるようになったことが決め手だろう。聞くところによると，最近の子どもは火

を自在に操ることができないという。マッチやライターにすら火をつけられない子も多いらしい。子どもを事故やいたずらから切り離すという時代背景もあるのだろうが、火を思いのままに操るといふ術は、ヒトが生活する上で身につけねばならない必須の能力だと思う。

木は、最高のバイオマスでありサステイナブルな社会を実現する最も身近な再生可能エネルギーだ。ゆらめくその炎は、木が何年何十年という歳月をかけて炭酸同化で蓄えた、太陽の熱エネルギーそのものだ。手をかざしてその思いを馳せれば、焚火はそれだけでも酒の肴となる。特にこの日の薪は海洋を旅しながら内部まで十分に塩分を含んだ特別な薪だ。ここに漂着するまでに、色々なものを見てきたのだろう。ナトリウムの炎色反応とともに、普段よりも柔らかい、黄色の炎が立ち上がる。普段からのノミネーション仲間ではあるが、その日の晚餐は料理のおいしさと相まって、皆いつになく饒舌であった。

蚊が全くいなかったことは幸いであったが、とにかくひどい蒸し暑さだったせいで、一晩中レム睡眠状態のまま時を過ごす。朝6時頃には目が覚めたが、他の3人はまだ夢の中のような。静寂に包まれたまだ青白い渚を、きれいな貝などを拾いながら数百メートルほど、浜の端から端まで散歩した。

テントからのそのそと這い出してきた小菌が「トイレに行ってくる」といって、沖のほうまで泳いでいった。ははあ、なかなか通な大自然満喫法だ。アフリカはサバンナの特集で見たことがある、水中で用をたすカバのお尻の周りに魚が群がるというあれを体感するつもりだ。癖にならなければよいが。

すっきりとしたコック長が朝食を手早く作ってくれ、腹を満たした3人はボートを引っ張り出して海に繰り出した。ただ一人、加塩がサンリオキャラ“ぐでたま”のように、横になってのびている。彼はこれまでいわゆるアウトドアというものをまともに体験したことがなかったが、今回段階を踏まずして究極のアウトドアとでもいうべき無人島に飛び込んでしまったのだ。ビニルハウスで育てた苗をいきなり路地に移植すると枯れてしまうことがあるが、これは周囲の環境が突然変化するストレスに耐えられないことによる。そのためビニルハウスで育てた苗は2・3日間半露地に移し、時間をかけて環境に慣れさせる必要がある。農業ではこれを「順化」というが、いわば彼は順化過程なしに大自然に晒されてしまった。アウトドア・アナフィラキシーショックの状態にあった彼は、寝不足もたまったのだろう、タープの下で一人静かに眠っていた。

小菌が波打ち際で、隣国から流れついたと思われる漁業用の黒くてサッカーボール大の浮きを見つけ、それを抱えて沖まで泳いで行った。それに抱き着いてラッコのようになって、水に沈めたりして遊んでいる。彼は黒のラッシュガードに黒の水着を履き、黒いゴーグルをつけていて、頭も5厘に剃り上げている。遠目から波間に見え隠れするその様子は何らかの海獣にも見えた。しかしこんな不気味な海獣は見たことがない。こういった人が通りがかりの船にUMAとして記録されるのだろう。

美しく、まるで竜宮城のような海だ。海に飛び込んだとたん、無数のキビナゴの群

れに囲まれた。何千というものではない、何万、何十万のキビナゴの群れだ。遙か彼方まで透き通った海の中を、キビナゴのきらきらとした体が太陽光を反射し、まるで不規則に動く銀河に吸い込まれたようだった。二回りほど大きな魚がその群れに突っ込んで、その銀河を無秩序にかき乱している。一部のキビナゴが波打ち際まで追い込まれ、逃げ場を空に求めて海面から飛び出している。昨日、初上陸した際に浜辺で見かけたキビナゴのミステリーはここに解明された。

探せばウミガメがいるかもしれないと思い、一人、少し外れの方まで泳いでみる。見つけた！まだまだ若いアオウミガメだ！急いで大坪と小菌を呼ぶ。しかし、大声を出しすぎてしまったせいか2人が到着するとほぼ同時に、ウミガメはすいーっと沖の方に向かって泳いで行った。束の間の出来事だったが、3人でしっかりとその姿を目に焼き付けることができ、よい思い出となった。

5メートルほどの高さの岩があり、その上から海に飛び込めるようになっている。下から見上げればそれほどの高さには感じないが、いざその上に登ってみると、足がすくむような高さだ。決心をつけて飛び込むまでに少しばかりの猶予が必要だった。大坪も気持ちいいと言っては何度もその岩から飛び込んでいる。それを見て岩に上がった小菌だったが、いてもたっても踏ん切りをつけられず飛び込めない。カウントダウンなどして加勢してやったが、「ファッ！」という掛け声だけが空に響き、体は拒否反応を示し硬直している。あまりにも飛び込めずにいるので、その様子が段々と面白くなってきた。結局飛び込むまでに岩の上で3分ほど右往左往していただろう、突然聞いたこともない奇声を上げて飛び込んだ。魚たちもさぞびっくりしたはずだ。人が決心をつけてものごとくに体当たりで挑むという瞬間に立ち会うことのできた、とても幸せな時間だ。

楽しい時間はあっという間に過ぎる。13時、約束の時刻に船長が迎えに来た。忘れ物を入念に確認し、楽しかった夢の島を後にした。

後日、奄美の知人から興味深い話を聞いた。近頃、行政上の諸事情によりエニャバナレへの自由な立ち入りができなくなったということだ。あの濃くも美しいエニャバナレでの二日間は、もう二度と味わえない（STAND BY MEで）、そう思うとハンミヤ島から急きょ変更を余儀なくされた天候不順も、何らかの縁だったと感じずにはいられないのだ。



江仁屋離島(エニャバナレ)パノラマ写真 中央右にベースタープ、更に右にテントが見える
写真左側が大島海峡、右側が東シナ海

(2) 日常を離れて (大坪 陸貴)

ア はじめに

学生時代からこれまで、幾度かのキャンプは体験してきた。とはいえ、それらはキャンプ場であったり、近場に店舗があったりと、何かあったときにはすぐに必要なものを購入することができるという環境であったため、これまでの自分にとっては、キャンプとはただ外で寝るもの、程度にしかとらえていなかった。今回、無人島という何もないところでのキャンプを体験し、これまでにはない、感じたことを紹介したい。

イ 無人島到着まで

朝7時に学校に集合し、荷物を1台の車にまとめ、出発した。天気予報通りの曇り空であったが、古仁屋に到着する頃にはきれいに晴れ始めた。海上タクシーで行くということで、古仁屋港でアポを取っていた船長さんを探し、予定より20分ほど遅れての出港となった。船長さんからボート(小さな舟)をお借りすることができたので、それを海上タクシーに乗せた。陸にあ



げてあるボートよりもタクシーの方が低いところに着岸していたため、ボートを下ろすのに大変苦労した。また普段のキャンプでは必要としない大量の飲料水や生活用水20リットルのタンクを積み込むのはなかなか重労働であった。無事出航し、外海に出ると今まで見たこともない景色が広がっていた。とにかく海がきれいで魚が跳ねていた。ここには青い珊瑚があると船長さんから言われ、帰りには泳がせていただけるとのこと、帰り道にも楽しみがあると思うとさらにわくわくしてきた。1時間くらい船に揺られエニャバナレに到着したが、聞いてはいたが見事に全く何もない島だ。あるのは周りの海と草木のみの世界。船を着ける堤防がないため近くの岩場に船を着け、大量の荷物をその岩場に降ろしたが、なにぶん切り立った天然の岩で荷物を置くスペースもほとんどなく、その場所には乗り切らない。そこでお借りしたボートを海に降ろし、そのボートに荷物を下ろして陸に揚げるという作業を何度も繰り返した。台風の時期には船が着けられない等の話を聞いていたが、初めてここでその意味がわかった。若干1名がこの過程でずぶ濡れになったが、なんとか無事に荷を陸に上げることができた。

ウ 1日目スタート

荷物を運び終え、まずは日陰作りのためにタープを設置した。とにかく何もない世界が広がっていて、身を寄せる陰も全くない。タープはかなりの強風でなかなかうまくたってくれなかったり、風ですぐ倒れたりしたが、大富先生がいろいろな固定方法を試しながら何とか日陰が完成した。先にテントを張る



ことになったが、満潮時にどこまで波が来るかわからず、なかなか張れずにいたところ、キャンプベテランの二人は手際よく張り始めた。さすがだと思った。

あっという間に日が高くなり、そこで昼食を摂った。朝が早かったため、朝食から時間がだいぶ経過しており、いつも食べているインスタント麺も、ここではいつも以上においしく感じた。その後は数回海で泳ぎ、明るいうちに薪を集めておいた方がいいとのことで大量の流木集めをした。



いよいよ夕食。たき火の火をおこして、気分を盛り立てるために購入したたいまつにも点火した。料理長の小菌氏がたくさんの種類のお肉を買っていてくれたため本当においしく、贅沢な時間であった。

目の前を通るフェリーや飛行機の光を眺めながらただただ時間が過ぎていく。何もしない、何もしなくていいという贅沢をひたすら味わった。くだらない話をしているとあっという間に深夜を回り、床に就いた。

エ 2日目スタート

下の砂を整地せずテントを張ったため寝床の状態が非常に悪く、寝心地の悪さで目が覚めた。無人島二日目のスタートである。軽く朝食を取り海に入ると、目前に、昨日はあまり見られなかった珊瑚の大群が現れた。昨日に比べ潮が引いており、沖に行きやすかったのが理由である。少し海水が冷たかったが、自分たちしかいない島の海をとにかく楽しんだ。

昼食はピザを焼くとのことで、小菌氏が一昨日からこねて発酵させていた生地をクーラーボックスから取り出した。しかし、どうやらイーストの発酵が進みすぎており、香りこそよいもののそれはスライムのようにドロドロになっていた。これでは使えないとのことで、魚のえさにすることに決まった。彼は出発前から魚のえさを作っていたんだと考えると、少し切なくなった。ピザの生地を手に、舟に乗って沖に出た。舵取りが難しくなかなかまっす



ぐ漕げなかったが、なんとか沖まで漕ぎ出し、海に飛び込むとまたまたきれいな珊瑚の群れとたくさんの魚が目に見え飛んできた。ピザの生地にもたくさんの魚が寄ってきた。大富先生が『ウミガメがいる』と叫ぶので、聞こえた方に全力で泳いでいくと、優雅に泳ぐウミガメがすぐそこにいた。人生で2回目の遭遇であった。沖の方に泳いでいってしまったが、その後ろ姿を見ていると心が和んだ。

この島には遺跡があるとの噂を聞いていたため、可能な限り山の方に歩いてみた。3箇所ほど道らしきものは

あったが途中で草むらに阻まれ先に行くことはできなかった。中には明らかに人工物のようなものがうっすら見えていたがやはりハブが怖く、それ以上は行くことができなかった。今度は草刈り道具を持って切り開いてみたいと強く感じた。

約束の13時。船が着き荷物を乗せた。最後のボートを乗せるが非常に大変だった。こつがあるらしく漁師さんは一人でもできるらしいが、4人がかりで何とか積み込むことができた。カナヅチの加塩氏を積み込むのも大変だった。しばらく走ると青い珊瑚礁のあるスポットについて。そのあたりだけは一面真っ青で、魚も無人島より多くいた。船長さんによると、このあたりでは青い珊瑚はここにしかないそうだ。小菌氏が炊いたお米の残りを蒔くと、たくさんの魚が寄ってきた。ずっとここで泳いでいたいと思ったが終わりの時間となった。



珊瑚礁に別れを告げると、あっという間に港に着いてしまった。舟から荷物を下ろし船長さんとも別れ、帰路についた。

オ おわりに

水もトイレも何もないところで一泊することがこんなにも大変で、こんなにも楽しいものとは思ってもいなかった。無人島は簡単には行けないところらしく（だからこそ無人島）、今回このような企画を立ててくださった大富先生には本当に感謝している。奄美高校にきて2年目、来年は3年目となる。まだまだ奄美にはおもしろいところがたくさんあるはずだと感じると来年が待ち遠しい。そしてこの楽しみがあると仕事もがんばれる。日頃から教師は体も心も健康でないと全力で生徒とは向き合えないなと感じている。次こそはハンミヤ島に行きたい。

(3) 不便と不自由（小菌）

「小菌先生、ハンミヤ島って知ってる？」そんな大富先生からの問いかけがきっかけだった。私は、聞いたことすらなかったが、すぐに調べ今年のキャンプ地に決定するまでさほど時間はかからなかった。大富先生とは、昨年、ヤドリ浜でキャンプを行い、それから毎年、奄美のキャンプ場を開拓するのを恒例にしようとしている。

しかし今回は、全国津々浦々の地でキャンプをしてきた私も経験がない無人島でのキャンプであり、難易度はトップクラスであるということが予想できた。そのため準備と調査にはかなりの時間を要した。ハンミヤ島に上陸するには、海上タクシーをチャーターする他になく、チャーター代や現地での食糧、荷物の輸送、他のメンバーの経験値などを考えると4～5人が適当ではないかという考えに至った。出発の2日前に、大富先生と朝仁のスーパーへ食料品を買いに行った。2日間のメニューを必死で考え店内を東奔西走していた私の横で、大富先生の「腹が減ったやつはな、スナック菓子でも食っときゃいいんだよ」と吐き捨てるような発言に私は閉口してしまった。昨年の図書館便りの新任者インタビューで「人間は、食べたものと読んだものででき

ている」と座右の銘で答えていたはずだがと思い返し、無人島の魅力というものは人を翻弄させるものなんだと感じた。

出発当日、請島と与路島の間にあるハンミヤ島が目的地だったが、出発当日ハンミヤ島周辺の波が高く上陸が難しいということで、加計呂麻島の西側にある江仁屋離島（エニャバナレ）に目的地を変更することになった。ハンミヤ島の大きな砂丘は非常に魅力的であったが、今回は「無人島」というキーワードが重要だったため船長と大富先生の変更案に快諾した。古仁屋港を出港し大島海峡を抜ける間にも、初めての海上タクシーに心弾ませ、大変珍しい青や赤の珊瑚の穴場スポットを教えてもらい束の間の船旅を満喫した（写真1）。出港し50分くらいたった頃、我々の目の前にエニャバナレは姿を現した（写真2）。海上タクシーで島の周り一周し、それから上陸した。岸壁のない島への上陸は想像以上に難しく、荷物を船から降ろし上陸する頃にはビショビショになっていた（写真3）。



写真1 船上の様子



写真2 江仁屋離島



写真3 上陸の様子

船からの荷降ろしを済ませると、大富先生が用意したタープを設営した。白い砂浜と岩場、アダンの木しかない島には日を遮るものがなくタープにはとても助けられた（写真4）。私は、自分の寝床でもあるテントをそそくさと立ち上げ昼食の準備に取り掛かった。月明かりでも容易に設営できるようにというコンセプトで開発された本テントの設営はさすがに早い（写真5）。早く昼食を摂って散策しようと考えメニューは、レトルトカレーと即席ラーメンにした。しかしこのメニュー選択が間違いであったとは後から気付くのであった。さて、飯盒で米を炊き、即席ラーメンの湯を沸かすのであるが、これまで使用してきたストーブは長旅でも燃料を入手しやすいガソリンを燃料とするものを相棒としてきたが、今回からカセットボンベを使用するものに新調した。ガソリンを加圧するためのポンピングの儀式も不要で初めから安定した炎が得られるガス式は使いやすかったが、それはいつの間にか自分の青春が終わっていたんだと感じさせるものであった（写真6）。



写真4 タープの設営



写真5 テント設営（右奥）



写真6 ストーブ

昼食の後、タープの下でしばしの昼寝を挟み、目の前に広がる海へと海中散策に出かけた(写真7)。若干の曇り空ではあったが、雲の隙間から太陽光が差し込んだ瞬間の海中はどこまでも透き通り、魚や貝たちもカラフルで時間を忘れて潜っていた。

夕食のメニューは、串焼き(もも・ねぎ間・かわ・砂ずり・レバー・豚バラ)、スペアリブの特製ダレ漬け込み(写真8)を用意した。メンバー中2人が内臓系を苦手とすることをその場で告げられ、砂ずりとレバーは少なくて良かったなど今後の参考にした。肉と酒を味わいながら、工業教育の未来について熱く語り合っているとあっという間に時間が過ぎた。宴も一段落し、そろそろ寝る準備をしようかとタープの外に出た。空を見上げると十三夜月には足りないくらいの月が煌々と光っていた。周囲に人工の光が無い島にはそれで十分で、濃藍色の空には満天の星空と数機の深夜便が人々を目的地へと運んでいた。そんな星空と深夜便を見上げていると「満点の星をいただく果てしない光の海を、豊かに流れゆく風に心を開けば、煌く星座の物語も聞こえてくる、夜の静寂のなんと饒舌なことでしょうか。光と影の境に消えていったはらかな地平線も臉に浮かんでまいります。」と某ラジオ番組のオープニングが頭を過ぎった。視線を下ろすと周りの島々の輪郭もくっきりと確認でき、月を映した海面がキラキラと眩しかった。星を眺めながら歯磨きを行い少々蒸し暑いテントで就寝した。



写真7 海中散策



写真8 夕食

朝は、波の音で目を覚まし、さっそく朝食の準備に取り掛かった。朝食は、ホットサンドにした。昨年から使用している鋳物のホットサンドメーカーは熱加減がちょうど良く、外はカリカリ、中はふっくら、具はとろ〜りとした食感で、浜辺のカフェがそこにはあった(写真9)。ホットサンドの具を準備しようとクーラーボックスを開けたときだった。ふわっとガス臭が鼻をかすめた。「やってしまった・・・。」フリーザーバックの中で、昼食用のピザ生地がパンパンに膨れ上がってどろどろになっていた(写真10)。出発前夜、焼き鳥の串打ちに予想以上に時間がかかりピザ生地の準備がそれからになってしまって冷凍時間が足らず、加えて昨夜の宴で氷を使いすぎてしまい保冷が足りず、生地の発酵が進んでしまっていたのである。こんなことになるのであれば、昨日の昼食をピザにしておけばよかったという後悔と、楽しみにしてくれていたメンバーに申し訳ないという思いでいっばいだった。しかし、そのままではもったいないので、その後の海中散策で撒き餌にした。昨日は見られなかったウミガメの優雅

に泳ぐ姿を観察し一同興奮した。

約束の時間になり、迎いの海上タクシーがやってきて手漕ぎ舟と荷物を積み込んだ。ピザを焼く機会を与えてもらえなかったダッチオーブンは、気のせいか来たときよりも重く感じた。手漕ぎボートを船に積み込むのはとても苦戦した。船長が、積めないなら曳航しようかと提案してきたが、すると帰りに青いサンゴ礁でのシュノーケリングの時間が無くなってしまうので、やっとの思いでなんとかボートを引き上げ出港した。

顔とふくらはぎのヒリヒリ感にちょっと反省をしつつ船尾波の奥に浮かぶエニヤバナレを眺めた（写真 11）。今回も人間の弱さ無力さ、そして自然の偉大さと大切さを感じるキャンプであった。このかけがえのない自然を後世に残すためにも、これからますます環境やエネルギー、近隣諸国との関係について考えていく必要があると感じた。今回は、断念したが次回は是非ともハンミヤ島に挑戦したい。



写真 9 朝食のホットサンド



写真 10 過発酵のピザ生地



写真 11 江二屋離島を後にする

(4) 〈自然 / 都市〉で読み解く現代キャンプ考（加塩 卓朗）

例えば、サファリパークという施設について考えてみよう。ライオンを初めとする様々な生き物たちが棲む「自然」の中を、4WDを駆って巡るあの施設である。ここで私たちは「自然」を体験することができる。しかしこれはあくまでも「自然」である。私たちの安全は概ね保障されており、自然の良いところ・美しいところだけをつまみ食的に味わうことができるように加工された「自然」である。もちろん、それが悪いということではない。それが情操を豊かにし、自然への興味がかき立てられるのであれば、意義のあるものであるからだ。

そのうえ、ライオンと触れあいたいという理由で、本物の自然に分け入っていこうという者が私たちのなかにどれだけいるであろうか。そのようなことを考える者は、自身が自然の一員として野獣に牙を剥かれる覚悟が無くてはならないのである。

上述の例から筆者が述べたいことは、私たちの多くは、いわゆるカギ括弧付きの虚構の「自然」が好きなのだということである。自身の安全が保証され、いつでも「都市」に帰ることが可能であるところの「自然」が――。

オートキャンプ場の隆盛はその証左となるであろう。それらのなかには、身一つで訪れても困ることのない設備があるところもあるということである。日々の都会の生活に疲れた現代人が都会の喧噪を離れ、「自然」の中でしばしの安息を得ることができ

るという意味においては、やはりこの施設も有意義なものであるだろう。

しかし、そのスポイルされたと言っても過言では無い「自然」では飽き足りないとき、人は労を厭わず自然に赴くのである。それがこの度の無人島キャンプであったと思う。

昼間はジリジリと照りつける太陽を疎ましく思いながら、どこまでも続く海を目にしないでならない。しかし、そのような状況だからこそ日常では忘れていた水の美味しさを認識することができた。

夜は、這い寄る無数の虫を逃れるようにしながら、襲い来る闇と無聊と向き合わなくてはならない。だが、そうであるからこそ、普段いかに無駄に囲まれて生きているのかを思い知ることになる。

同行者たちから筆者は、無人島キャンプ中死んだようだったと言われた。おそらくそうだったのだろう。とはいえ、メディアによって作り上げられた「自然」ではなく、本物の自然を生きたあの時間が無ければ、私は「都市」の価値を本当には知ることにはなかったと思っている。

国語評論の古くからのテーマの一つである〈自然／都市〉という二項対立についてあらためて思いを致すことのできる貴重な経験であった。

5 おわりに

今回の研修について、参加者4名がそれぞれの視点で所感を執筆した。記載した以外にも、例えば出発時に古仁屋港で船に荷物を積む際に積み残しがあって、翌日古仁屋港に帰ってきたらその荷が堤防の隅にちょこんと鎮座していたことの顛末であったり、エニャバナレに到着して船長に「また明日よろしく」とあいさつして別れた10分後に、忘れ物が船内にあったとあって船長が戻ってきてくれたり、とにかく蛇足的なエピソードは枚挙にいとまがない。割愛ということばの意味をはじめて深く噛みしめ紙面の都合で筆を置いたが、そんな蛇足も含めて全てが思い出であり、経験として血や肉となった。今回得ることのできたこの経験を、授業等を通じて少しでも生徒に還元していきたい。また、今回は実現できなかったハンミヤ島への渡航も、今夏には実現したい。我々に残された「研修期間」は残り少ないのだ。目下、帯同研修員を募集中である。